

学位請求論文審査報告書

氏名 上山 慧

論文題目 明治期仏教と初期社会主義
一大逆事件に関係した五人の仏教者たちを中心に―

審査委員 主査 大谷大学教授 福島栄寿
博士（文学） [大谷大学]
副査 大谷大学教授 宮崎健司
博士（文学） [大谷大学]
副査 大谷大学教授 脇中 洋
副査 明治大学名誉教授 山泉 進

I. 論文内容の要旨

本論文は、仏教者と初期社会主義（「ロシア革命後の『社会主義』に対して、〈初期〉にイメージされる、〈未熟〉で〈曖昧〉で、〈多様〉で〈理念的〉である」思想 [山泉進『初期社会主義研究』第5号、1991]）であり、平民社を中心とする「多様な人々の多分に混沌たる諸思想」状態ゆえに「多様な発展の可能性が孕まれていた」 [松沢弘陽『日本社会主義の思想』1973] とされる）との関係について、1910（明治43）年の大逆事件に関係した五人の仏教者を取り上げ考察するものである。具体的には、大逆事件に連座した内山愚童（曹洞宗僧侶・1874～1911）・高木顕明（真宗大谷派僧侶・1864～1914）・峯尾節堂（臨済宗妙心寺派僧侶・1885～1919）と、事件容疑者の井上秀天（曹洞宗僧侶・1880～1945）・毛利柴庵（真言宗僧侶・1872～1938）の仏教（宗教）思想と初期社会主義との関係を重点的に考察し、五人それぞれの思想的特徴と、加えて共通点を明らかにする。かかる考察を通し、初期社会主義の有様のみならず彼ら仏教者たちの思想が持ち得た可能性についても明らかにしようとする。本論文の構成と内容は次の通りである。

序 章

第一節 本論の主題

第二節 先行研究と本論の構成

第一章 内山愚童の仏教社会主義とその行動

第一節 内山愚童の社会主義と仏教思想

(一) 社会主義思想への共鳴

(二) 宗教者としての愚童

第二節 秘密出版『入獄紀念 無政府共産』

第三節 獄中手記「平凡の自覚」と無題「遺稿」

第二章 高木顕明の思想的変遷

第一節 浄泉寺入寺前とその後の顕明

第二節 「余が社会主義」の執筆

第三節 社会主義への接近と信仰生活の確立

第三章 峯尾節堂の社会主義とその「転向」

第一節 峯尾節堂と社会主義との関係

第二節 節堂執筆の論説について

第三節 獄中手記「我懺悔の一節」

第四章 井上秀天と初期社会主義との関係について

第一節 「神戸平民倶楽部」の会員

第二節 中央の社会主義者との交流

第三節 井上秀天と大逆事件

第五章 『牟婁新報』と毛利柴庵の思想

第一節 『牟婁新報』の創刊と「新仏教徒同志会」との関係

第二節 毛利柴庵の日露戦争観

第三節 『牟婁新報』への弾圧

(一) 官吏侮辱事件

(二) 大逆事件

結 章／註・参考文献

第一章では、内山愚童の仏教思想を社会主義との関係から論じる。愚童と大逆事件との関係を論じた研究は多いが、かかる視点からする愚童研究は少ない。愚童は、1904（明治37）年2月の『平民新聞』の読者投稿欄に「予は如何にして社会主義者となりし乎」を投稿し、そこで仏教教義と社会主義とが全く一致するとの認識を示した。1908（明治41）年秋頃に秘密出版した『入獄紀念 無政府共産』では、急進的な無政府主義を主張するも、出版目的は「安楽自由なる無政府共産の理想国」の実現のために「迷信」から民衆を目覚めさせることにあったと指摘する。出版法違反で逮捕された愚童は大逆事件に連座し死刑になるまでの獄中生活で、「平凡の自覚」と無題「遺稿」という手記を書き残した。これらの手記で「理性」による「自覚」への到達により獲得できる「独立・自由」「自治」という個人の尊厳と責任と、「相互扶助」「共同」という他者との共生と連帯に基づく理想社会の実現を主張したと論じた。

第二章では、高木顕明の思想的変遷を論じた。顕明は被差別部落解放・非戦論・廃娼の先駆者というイメージが強い。しかし彼の思想的変遷に着目した研究は少ない。顕明は1894（明治27）年頃に行った「日蓮宗非仏教」という講演のなかで、国体護持・天皇尊崇を唱え部落差別を利用して日蓮批判をしている点を指摘した。1897（明治30）年に和歌山県新宮で被差別部落の門徒を多く抱える浄泉寺に入寺し、部落民の生活実態を目の当たりにした彼は、被差別部落の改善の行動に取り組む。1904（明治37）年2月、日露戦争開戦後、顕明は非戦論を主張し、同年10月には「余が社会主義」を執筆。その内容は真宗の教義に基づく非戦論・平等主義論であった。顕明が社会主義に接近したきっかけは、1903（明治36）年10月、幸徳秋水・堺利彦・内村鑑三が非戦論を主張して萬朝報社を退社したことに関心を寄せたことだが、最終的に彼は社会主義からは遠ざかり、自らの真宗の信仰に生きることを選んだと論じた。

第三章では、峯尾節堂の社会主義との関係と、先行研究では史料として重要視されてこなかった獄中手記「我懺悔の一節」の再評価を通して、節堂の「転向」を考察した。節堂は、1905（明治38）年頃から非戦論に関心をもち、キリスト教社会主義者の安部磯雄の著書を読み、宗教は社会主義でなければならないと考えるようになった。節堂は、1909（明治42）年6月の『熊野新報』に「忘れられたる根本義」を投稿、キリストの「人は麵麩のみにて生きる者にあらず」という言葉から、富が一部の者に集中し、多くの民衆が弱肉強食説に絡め取られ、人類の相互扶助の根本義が忘却されている現状を批判したと指摘する。さらに節堂は、大逆事件前には社会主義から遠ざかっていた点を指摘する。大逆事件に連座し無期囚として収監されている間に、節堂は手記「我懺悔の一節」を

執筆した。先行研究では、この手記に節堂の人的弱さを露呈した懺悔や伝統思想への「転向」が見られる点が批判されているが、検事による取り調べの様子や事件の実相についても記述があり、大逆事件連座者の証言として、節堂の思想を知る上でも評価されるべき資料であると指摘した。

第四章では、仏教思想と平和論に関する先行研究が多い井上秀天と社会主義との関係を論じた。秀天は、1906（明治39）年5月、神戸市の週刊『平民新聞』読者会で社会主義研究会の「神戸平民倶楽部」の会員となる。本章では、「神戸平民倶楽部」での秀天の活動を通じた幸徳秋水ら中央や地方の社会主義者たちとの交流が考察される。大逆事件では、秀天は神戸における大逆事件の容疑者として家宅捜索を受けるも不起訴となったが、大正年間には「要視察人」として官憲の監視下に置かれた。しかし、秀天が大逆事件後も社会主義者に好感を抱き、『新仏教』への寄稿で大逆事件や社会主義に言及している点を指摘する。社会主義の「冬の時代」においても、そうした論説を地方から寄稿していたことは特筆すべきであるとした。

第五章では、毛利柴庵の社会主義との関係に加え、柴庵の日露戦争観や彼が発行に関わった『牟婁新報』への弾圧について論じた。研究史的には、近年復刻された『牟婁新報』と同じく近年古書店で発見された『牟婁新報』号外を史料に用いた点が重要である。1900（明治33）年4月、柴庵は和歌山県田辺で牟婁地方の振興を目的に『牟婁新報』を創刊し、自ら主幹兼主筆を務めた。翌年秋、東京遊学中に「新仏教徒同志会」の会員となった彼は、同志会の運動に積極的に加わった。同志会の足尾鉾山鉾毒問題への取り組みを通じて柴庵は社会主義に関心を寄せていく。田辺に帰郷した彼は「マークス」という名前で『牟婁新報』に社会主義に関する論説を次々と発表した。これにより『牟婁新報』は社会主義の機関紙的な様相を呈し始めた点が指摘される。日露戦争開戦後、幸徳秋水や堺利彦ら中央の社会主義者は非戦論を主張するも、柴庵は『牟婁新報』の紙面で開戦論を主張した。その主張の背景には、彼が日露戦争を折伏と理解していたとともに天皇尊崇の考えがあった点が指摘される。日露戦後、柴庵や『牟婁新報』は官吏侮辱事件と大逆事件の二度、弾圧を受けた。しかし大逆事件後であっても、柴庵は『牟婁新報』に「家宅捜査大賛成論」を連載して政府による思想弾圧を批判し続けた点が指摘される。

結章では、以上の各章の内容を要約し、さらにそれぞれの仏教者の思想的特徴について、以下のように論じている。すなわち愚童は、無政府主義に傾倒し、秘密出版で天皇制を明確に批判していたが、他方、柴庵は天皇を終始尊崇していた。このような柴庵の天皇観は、当時の社会主義者の一般的な傾向からみれば異端であった。顕明は、「日蓮宗非仏教」で日蓮を差別的な言葉で批判したが、浄泉寺の被差別部落の門徒と出会ったことで部落解放・非戦論へと思想を変化させていった。節堂は、地元新聞に寄稿するなどしていたが、最終的には社会主義から遠ざかった。大逆事件後、秀天は大逆事件や社会主義に関する論説を発表し、柴庵は『牟婁新報』に社会主義者について論説を掲載し、自身も同紙で政府による思想弾圧を批判し続けていた。これに対して、節堂の場合は、真宗に帰依し、保守的な思想に「転向」している。しかし節堂は「忘れられたる根本義」で、キリストの言葉を引用して人類が相互扶助の精神を忘却したことを批判したように、彼は自らの思想にキリスト教社会主義の考えを取り入れることに抵抗を感じることはなかったという点が指摘される。秀天は、「神戸平民倶楽部」の会員になり、中央の社会主義者と交流していた。しかし、同じ曹洞宗の愚童が天皇制を批判していたのに対して、秀天は暴力といった過激な主張とは一線を画していたと論じた。

加えて五人の共通点として、以下の三点を指摘した。まず、彼らは中央の社会主義者と交流し、またキリスト教の方面にも交友関係を持っていたこと。二つ目に、仏教者である彼らが社会主義に接近したのは、共通して当時の所属教団のあり方に批判的であったためと考えられること。三つ目

に、彼らは仏教思想の理想を現実社会において実現していくために、制度改革理論としての社会主義に接近し、自らの運動や主張を展開させていったことである。そして、彼ら五人の仏教者の思想的営みは、様々な限界を有し、また弾圧にも遭ったが、しかしながら仏教（宗教）思想を基盤とした初期社会主義が展開する可能性を示すものでもあったと結論づけた。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、大逆事件に関係した五人の仏教者の視点から初期社会主義について、それぞれのライフヒストリーと思想的特徴について、史料に基づきながら実証的に考察を試みた大変意欲的な研究である。仏教者の視点の導入という点においては、従来の初期社会主義研究史の間隙を埋める研究として評価できる。加えて、仏教史研究と初期社会主義研究という領域をまたぐ研究の可能性を示したという点においても重要な研究である。以下、課題と考えられる点と口述試問で指摘された点などを述べておく。

序章では、各章ごとに先行研究の整理を通して研究課題を明確にしている。本論文全体を貫く筆者の問題意識を論じた部分であり、その研究史の目配りのよい整理から無理なく各章の課題が導かれている。仏教者の視座からする初期社会主義研究の試みの提言は、筆者の新たな研究領域を拓こうとする意欲が感じられ、評価できる。ただ、この五人の仏教者を取り上げた理由について説明がなされていない点が惜しまれるとの指摘があった。また、本論文の主題と深く関係する大逆事件そのものの説明についても、序章においてなされるべきではなかったかとの指摘があった。

第一章から第五章の各章は、それぞれにこれまでの研究成果を踏まえながら、新しい知見を指摘している点は、評価できる。ただ、各章ごとの結論部分が割愛され、結章にまとめて記載されているため、各章ごとの主張が存分に論じ切れていない印象を受ける。紙幅の都合のためとのことであったが、惜しまれる。また些末な点だが、各章や節の見出しの行間隔が充分でなく、また文字間隔も開き過ぎている感もあり読みにくい。論文を作品として捉えるならば、全体の構成や書式に加え、参考文献の挙げ方も先行研究論文・著書類、一次史料、二次史料を分けて記載するなど、読ませるための工夫がもう少しあっても良かったのではないかという点も指摘された。

次に史料解釈の方法に関して、雑誌や新聞記事、小説、獄中手記、裁判の予審調書など様々な史・資料を分析対象として取り上げているが、これら性格の異なる史・資料を扱う場合の史料批判に関する筆者の考えについて然るべき説明が必要ではなかったかとの指摘がなされた。また五人の仏教者は宗派が異なるが、そうした宗派の違いを意識した考察があれば、それぞれの思想的特徴を指摘する際にも、より説得力を持ち得たのではないかとの指摘がなされた。そして無いものねだりではあるが、彼らを弾圧する側に立った仏教者についての考察が加われば、より複眼的で厚みのある内容となったと思われるとの指摘もなされた。

以上のように、本論文には、全体の構成や史料批判に関する問題点など不十分な点も見られるが、全体としては、仏教者の視座を導入して初期社会主義の意義を明らかにしようし、仏教史研究と初期社会主義研究という研究領域をまたぐ研究の可能性を拓くなど、幾つかの重要かつ新たな研究成果が認められる。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2019 年 1 月 24 日に試問を行なった。その結果、審査委員一同一致して、上山慧に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当であると判断した。